

龍ヶ馬場Ⅱ遺跡

—発掘調査報告書—

1996

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター

序 文

平成7年度における水沢市埋蔵文化財調査センターの遺跡発掘調査結果につきまして報告申し上げます。

当センター発足2年目をむかえ、昨年同様の視点にたち、単なる発掘調査に終わるだけでなく、それらの文化財の秘める貴重な意義について理解し、保護しようとする心を育むための啓発活動として、出土遺物の展示公開、考古学研修講座や考古学教室の開催、講演会（今年度は三内丸山遺跡と平泉柳之御所跡についてと、胆沢城跡発掘40年を振り返ってなど）を実施致してまいりました。

現在、水沢市内には270か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。今年度は更に9か所を発掘調査致しました（東大畑遺跡、半入屋敷遺跡、林前Ⅰ遺跡2か所、龍ヶ馬場Ⅱ遺跡、雷神Ⅰ遺跡、杉の堂遺跡、仙人西遺跡、胆沢城跡）。胆沢城跡を除き8か所の調査は、県立病院や国道バイパス工事に伴う開発計画、及び住宅建設のためのものであります。従来の考え方「まずは文化財の保護」と、現在の考え方「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」という考え方の変化の狭間にあつて、発掘調査の任務にあたる私どもは、消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を課せられていることを深く自覚しなければなりません。当然のことですがこのことを所員一同心して報告書作成にあたりました。

また、各遺跡の発掘状況や結果については、その都度、所報「鎮守府胆沢城」や所内に図版、写真など掲示したり遺物を展示してお目にかかけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、文化庁、岩手県教育委員会文化課、県埋蔵文化財センターはじめ多くの方々のご指導、ご助言を戴きました。厚く御礼申し上げます。

尚、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成8年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター
所長 及川由己

例 言

- 1、本書は岩手県水沢市字龍ヶ馬場地内に所在する龍ヶ馬場Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、水沢市都市計画道路新小路龍ヶ馬場線改良工事に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
- 3、龍ヶ馬場Ⅱ遺跡の調査対象面積は2,500㎡であり、うち調査実施面積は534㎡である。
- 4、発掘調査期間は、現場作業が平成7年5月16日～平成7年6月20日、以後、平成8年3月31日まで室内整理作業を行った。
- 5、発掘調査は、伊藤博幸が担当し、池田明朗、佐々木千鶴子がこれを助けた。
- 6、本書の作成は、遺構の実測、縮尺及びトレース等は千田サノ子、青木綾子、渡辺弘子、小野寺陽子、村沢貴美子が行い、写真、執筆、編集は伊藤が行い、池田がこれを助けた。
- 7、本書に掲載の遺跡周辺地形図は、水沢市都市計画図（縮尺2,500分の1）を原寸のまま使用し、スケールを付していない。
- 8、本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。
SA：柱穴(群) SB：建物 SD：溝 SK：土壌 SX：その他不明遺構

目 次

序 文	
例 言	
I、遺跡の位置と環境	1
II、遺 構	3
1、A地区	3
土壙跡 S K 01	3
溝跡 S D 02	4
柱穴跡	4
2、B地区	6
建物跡 S B 055	9
柱穴跡 S A 057	11
柱穴跡	11
III、ま と め	11

図版目次

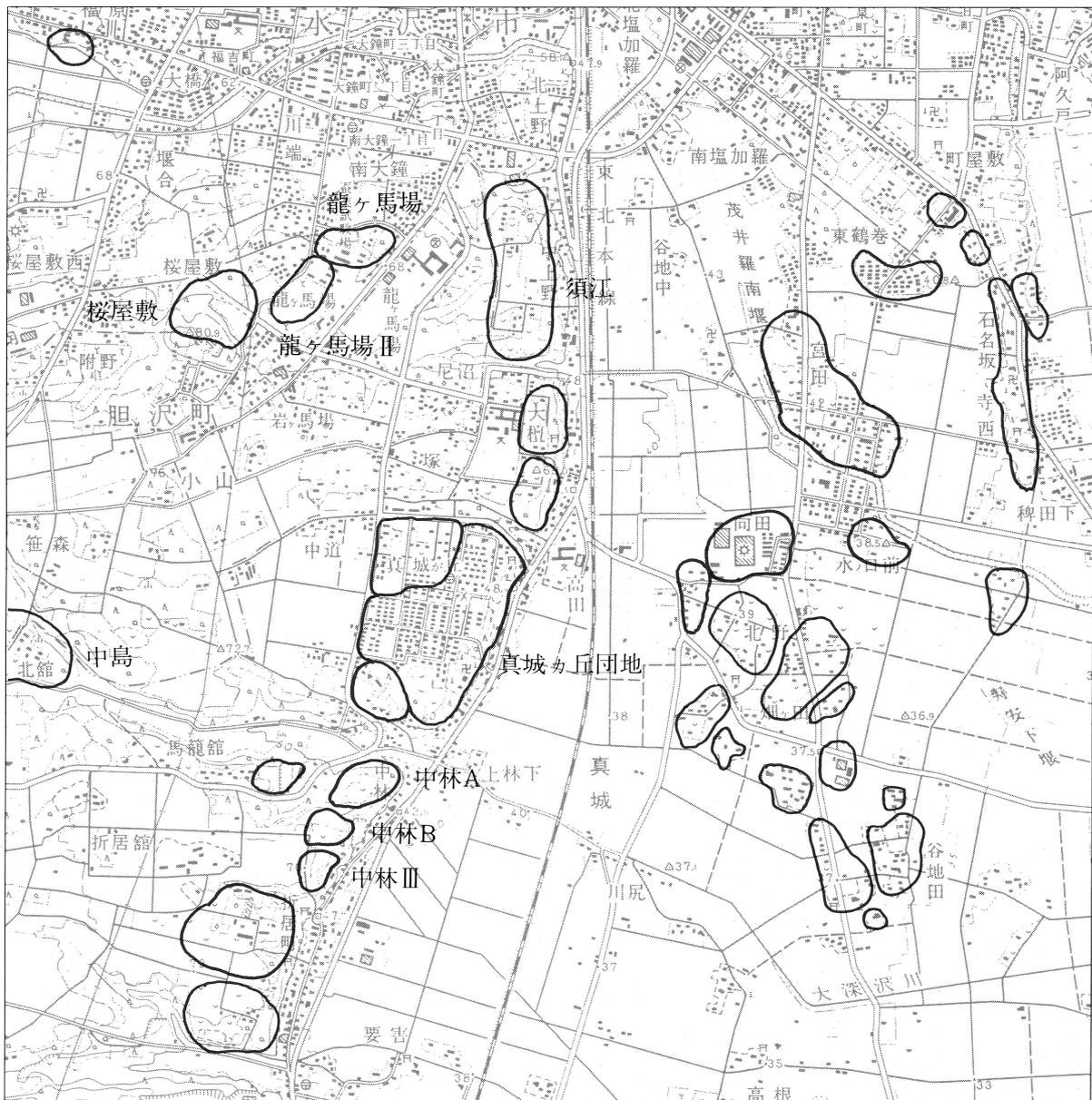
図版 1	A地区発掘区全景
	同 近景
図版 2	土壙跡 S K 01
	溝跡 S D 02
図版 3	柱穴跡 No. 7、No. 11、No. 25
	柱穴跡 No. 16
図版 4	柱穴跡 No. 17、No. 20
	柱穴跡 No. 14
図版 5	柱穴跡立割り状況
図版 6	B地区発掘区全景
	同 近景
図版 7	建物跡 S B 055全景
	同 近景
図版 8	柱掘り方立割り状況
図版 9	B地区小柱穴跡群全景
	同 近景
図版 10	B地区発掘調査光景とトレンチャー痕跡

I、遺跡の位置と環境

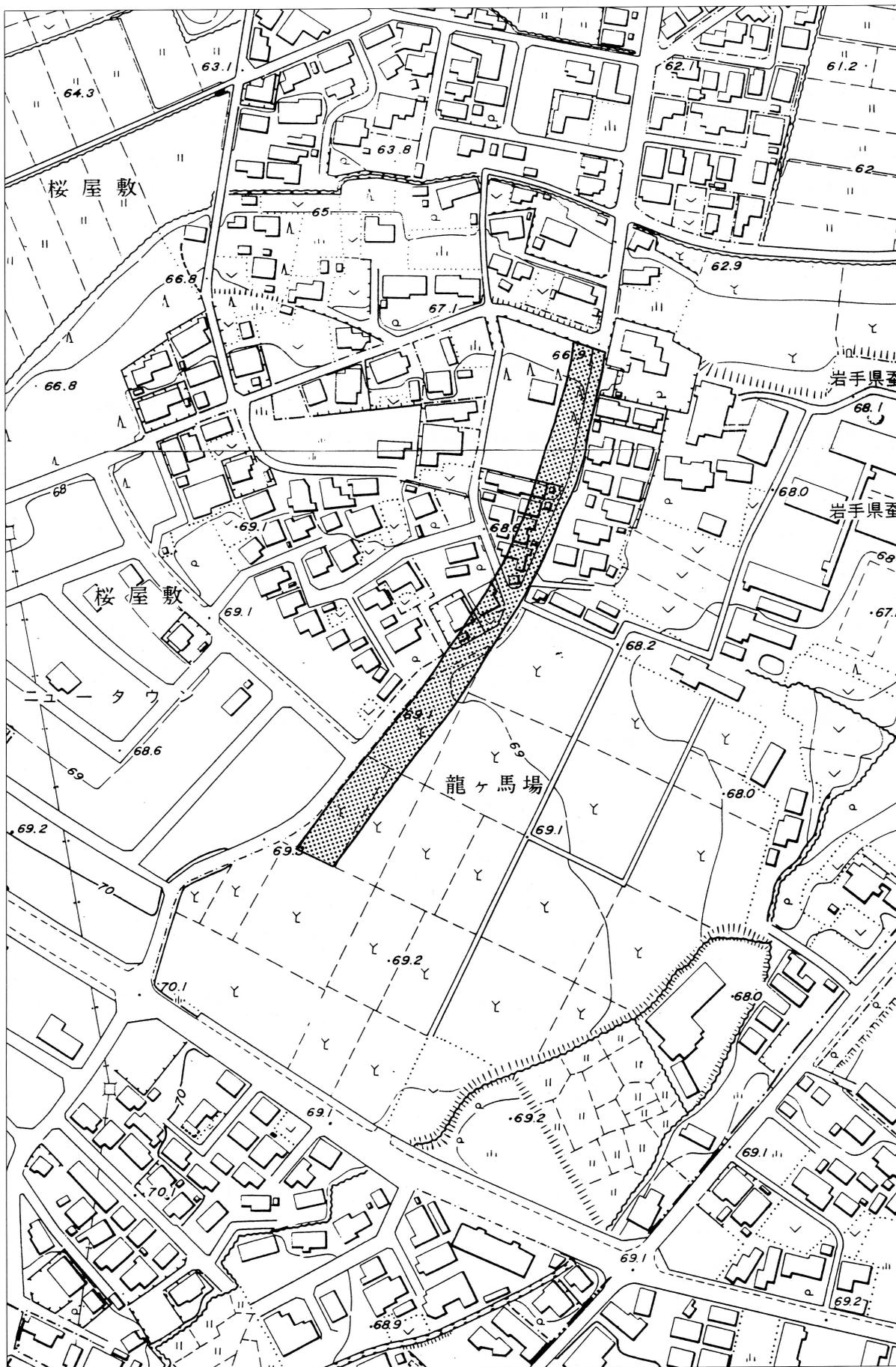
龍ヶ馬場Ⅱ遺跡は水沢市域のほぼ中央、南端の新興住宅地内にある。東北本線JR水沢駅の南南西約2kmにあたる。

遺跡のある胆沢平野は、北西を胆沢川が、南西を衣川（北股川）が、東を北上川が限り、胆沢町若柳の市野々を扇頂部にして、東方に約20kmの半径をもって、北上川に及ぶ広大な胆沢川扇状地と、北上川の氾濫平野からなる。胆沢川扇状地は南の高位から北の低位へ順に、一首坂、胆沢、水沢の三段丘に分けられ、龍ヶ馬場Ⅱ遺跡はこの中位面である胆沢段丘上に立地している。一帯の標高は68～69である。低位面の水沢段丘との比高差は25～26mある。

胆沢段丘上には縄文時代を除くと、古墳時代～奈良時代の遺跡は存在せず、平安時代以降新たに開発される段丘である。龍ヶ馬場Ⅱ遺跡周辺の主たる遺跡の分布を見ると、段丘縁辺部に連続と分布する特徴がある。このうち、縄文時代の遺跡は段丘北縁部に東西方向に分布し、平安時代の遺跡は段丘



第1図 遺跡位置図（1：25,000）



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500) 発掘区アミ部分

東縁部に南北方向に分布するという特色を示す(第1図)。当遺跡のすぐ北側には1994年に発掘調査が実施された龍ヶ馬場遺跡²⁾があり、平安時代中期頃の竪穴住居跡6棟、炭窯跡1基、土壙跡16基、陥し穴状遺構などが発見されている。また、西隣して小丘陵を囲むように桜屋敷遺跡³⁾がある。1989年に広範囲にわたって試掘調査を実施したが、遺構は発見されていない。

龍ヶ馬場Ⅱ遺跡の東方段丘縁辺には須江遺跡があり、その南には小支谷を隔てて、上野遺跡、大壇遺跡が続く。さらに南には北を堤尻川、南縁を大深沢川によって限られた大規模集落跡真城ヶ丘団地⁴⁾遺跡が東縁辺に沿って南北方向に展開する。発掘調査は1972年に実施され、平安時代竪穴住居跡が21棟発見されている。また、大深沢川を隔てた南にはこれも大規模集落跡のひとつである中林遺跡群⁵⁾がある。1990年の発掘調査によって、9世紀後半代を中心とした竪穴住居跡が25棟以上見つかっている。

以上は、平安時代の9・10世紀代の遺跡が中心であるが、龍ヶ馬場Ⅱ遺跡の南西方には縄文中期集落の代表的遺跡である中島遺跡⁶⁾がある。1964年と1985年に発掘調査が行われ、竪穴住居跡、石囲炉が縄文土器、石器とともに発見されている。

龍ヶ馬場Ⅱ遺跡の立地と周辺の概況は以上のとおりである。今回の発掘調査は、これらの成果を踏まえて実施したものである。現状は宅地跡と桑園跡である。

Ⅱ、遺 構

発掘調査は道路改良工事区域で、遺跡の北側と南側に発掘区を設定して実施した。北側をA地区、南側をB地区と称する(第3図)。A地区の標高68.2~68.3m、B地区の標高69.0~69.1mある。

1、A地区(第4図)

A地区は遺跡の北側に位置し、密集した宅地により、遺構の破壊が進んでいた。とくに南端方東西方向に延びる旧用水路の掘削のため破壊が著しい。

発掘調査で発見した遺構には、土壙跡1、溝跡1条、柱穴多数がある(第4図)。以下、主な遺構について述べる。

土壙跡SK01(第5図)

土壙跡SK01は、発掘区北壁寄り中央やや西側から発見された。遺構の残存状態は良い方である。平面形はほぼ円形で、規模は東西0.9m×南北0.8m、深さ10cmある。壁の掘削は比較的ていねいで、緩やかに外傾する側壁は平坦な底面に続く。埋土は単層で、比較的しまった土質の黒褐色土に黄褐色火山灰土の小ブロック・粒が混じる。出土遺物はない。

1) 伊藤博幸「胆沢城と古代村落——自然村落と計画村落——」(『日本史研究』215号、1980年)29~56ページ。

2) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『水沢市龍ヶ馬場遺跡現地説明会資料』(1994年)

3) 伊藤博幸・佐久間賢『水沢遺跡群範囲確認調査—平成元年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第21集(水沢市教育委員会、1990年)22~23ページ。

4) 水沢市教育委員会『上野団地遺跡緊急調査現地説明会資料』(1972年)

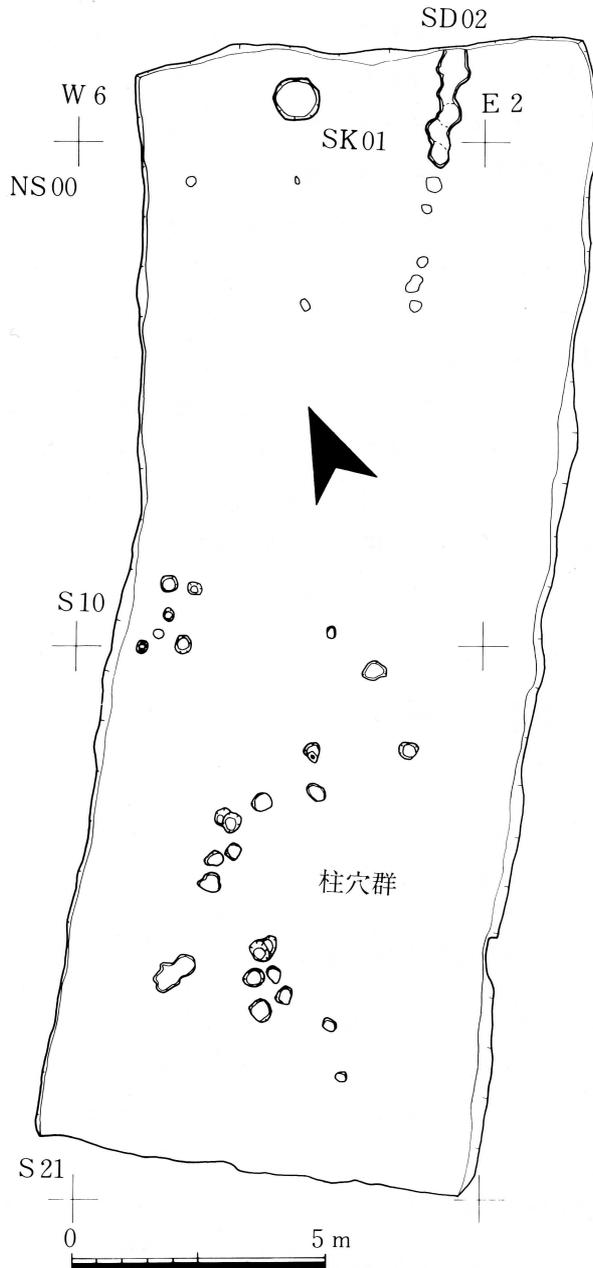
5) 伊藤・佐久間『水沢遺跡群範囲確認調査—平成2年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第22集(水沢市教育委員会、1991年)13~32ページ。

6) 草間俊一・伊藤鉄夫外「水沢の原始・古代遺跡—外浦・中島・鶴木三遺跡調査報告—」(水沢市教育委員会、1965年)33~42ページ。

伊藤・佐久間・土沼章一『水沢遺跡群範囲確認調査—昭和60年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第15集(水沢市教育委員会、1986年)1ページ。



第3図 発掘区関連図



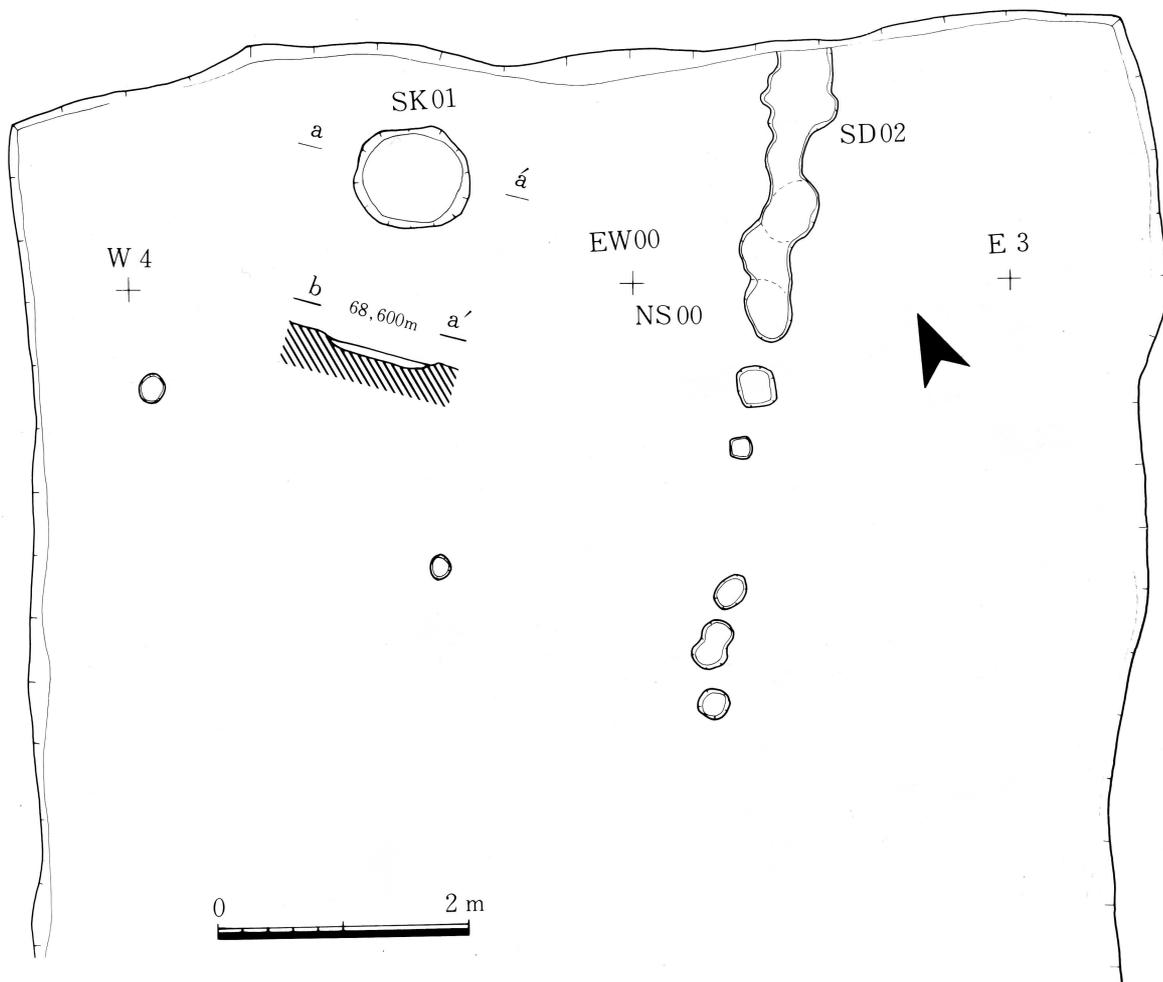
第4図 A地区遺構配置図

溝跡SD02 (第5図)

溝跡SD02は、土壇跡SK01の東側2mのところから南北方向に発見された素掘りの溝状遺構である。発掘区北壁際から南へ2.3m分を検出できたにすぎず、全長は不明。溝の南端付近は小柱穴と重複を示し、輪郭そのものがイレギュラーである。規模は幅0.3~0.4m、深さ10cm未満と浅い。埋土は黒灰褐色土に黄褐色火山灰土ブロックが多く混じる単層で、出土遺物はない。

柱穴跡 (第6図)

発掘区南半を中心に30個以上の小柱穴が発見された。形状は円形が主体で、隅丸方形のものが若干見られる。掘り方の規模は直径15cm~45cmまでであるが、おおむね15~20cm前後、25cm~35cm、40cm~45cmの3種に分かれる。前者が少なく、後二者が多い。埋土は基本的に単層で、2種に大別される。



第5図 土壇跡SK01・溝跡SD02

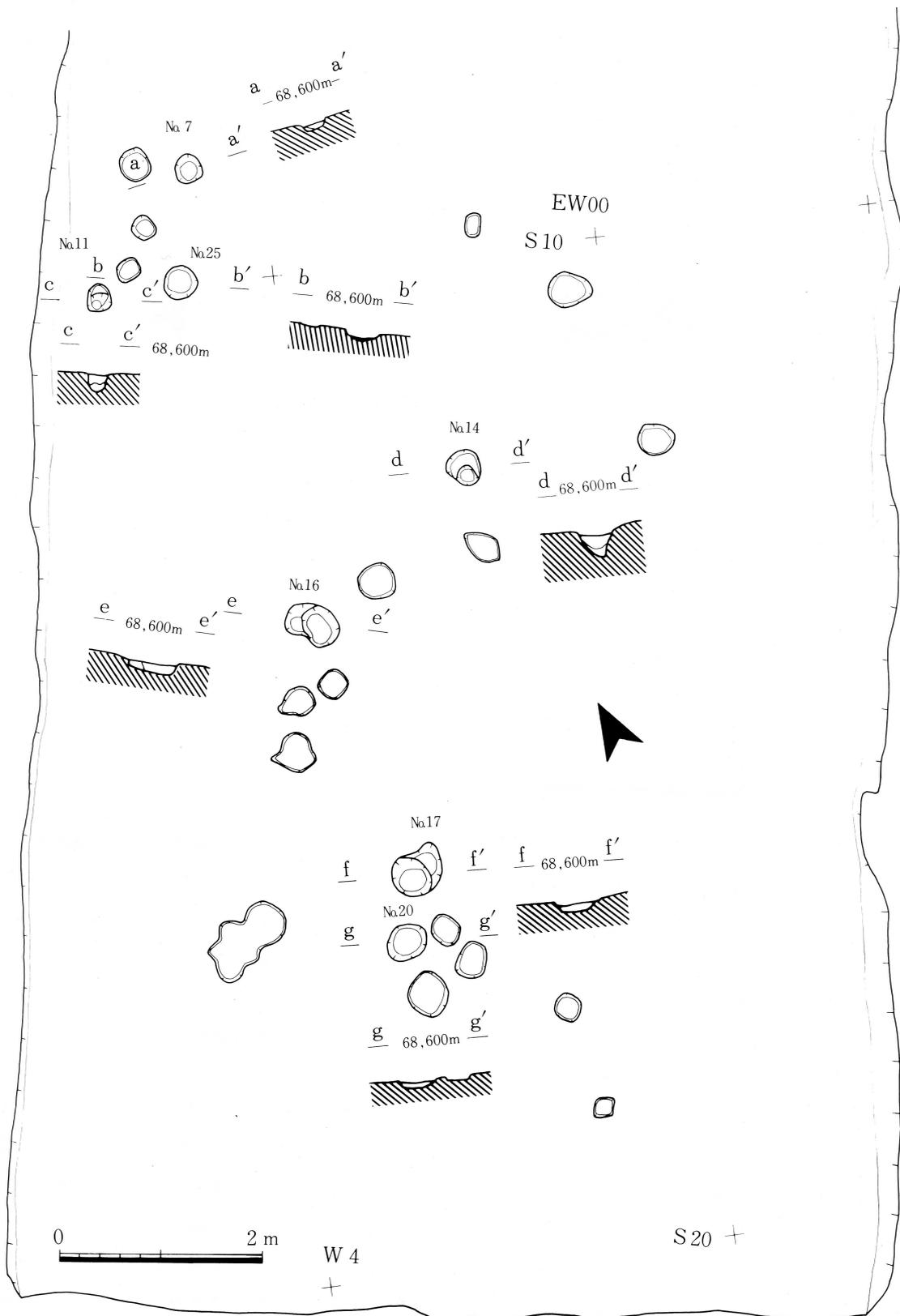
A種は比較的しまる土質の黒褐色土に黄褐色火山灰土粒が僅かに混じるものと、黄褐色火山灰土粒が多いAⅡ種がある。B種は黒灰褐色土に黄褐色火山灰土ブロックが多く混じる埋土で、さらにややしまる土質の黒灰褐色土に火山灰土粒が混じるBⅡ種がある。埋土A種が全体の40%を占め、AⅡ・B種が各20%、BⅡ種が10%の比率であり、残り10%が攪乱や破壊で不明のものである。

掘り方の深さは15cm～30cmまでであるが、比較的浅いものが多い。壁の掘削はていねいなものが多いが、柱当りは認められない。以下、いくつかの柱穴について記述する。

柱穴No.7は発掘区中央西壁寄りから発見されたもので、埋土はB種、西側下層に地山の火山灰崩壊土がある。深さ12cmともっとも浅い。柱穴No.11はNo.7の1.5m南西方にある柱穴で、埋土はB種、下層には地山崩壊土が堆積している。深さ20cmある。柱穴No.25はNo.11の東側から発見された円形柱穴だが、削平のため外傾する壁が僅かに残るていどのものであった。埋土はB種。No.25の南3.5mのところには重複する柱穴No.16がある。壁の掘削はていねいに行われ、深さ16cmある。埋土はBⅡ種。No.16の南2.5mには柱穴No.17がある。埋土はA種。壁は外傾するが、ていねいな掘削である。深さ15cmある。柱穴No.20はNo.17に南接してあるが、削平により基部しか残っていない。埋土はA種。

柱穴No.14は発掘区中央南寄りのところから発見されたもので、埋土はAⅡ種、下層に地山の火山灰崩壊土がある。深さ32cmある。

以上がA地区発見の柱穴群の概況だが、すべて建物跡や柱列跡としてまとまるものはなく、また出土遺物もなかった。

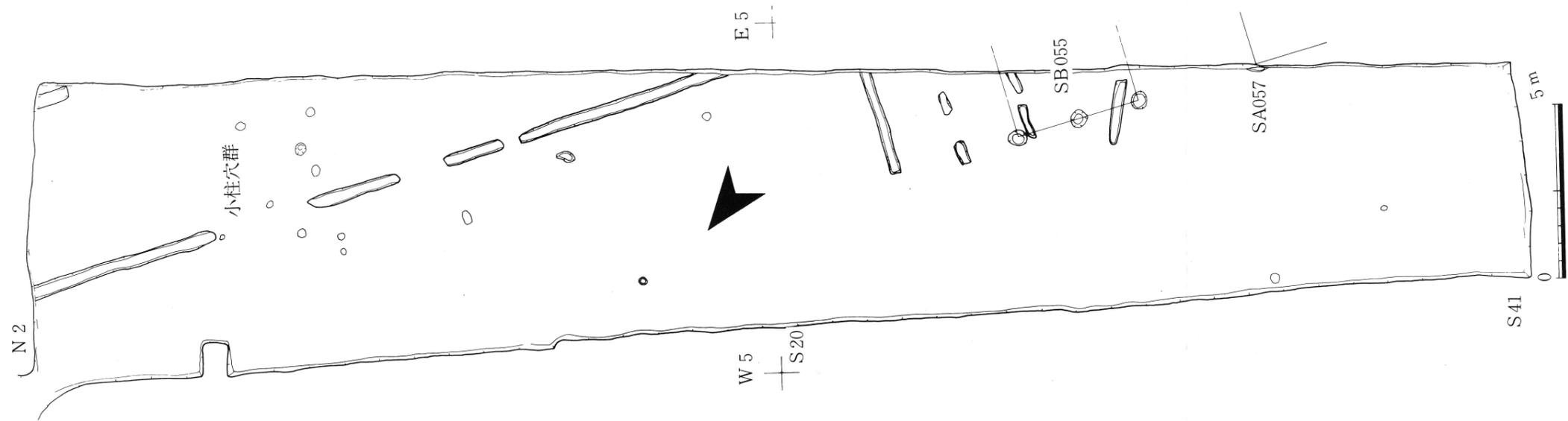


第6図 柱穴跡No.7・No.11・No.25・No.16・No.17・No.20・No.14

2、B地区(第7図)

B地区はA地区の南方90mのところの位置し、現状は桑畑である。

発掘調査で発見した遺構には、建物跡1棟、柱穴跡1、柱穴多数、溝跡6条がある(第7図)。この

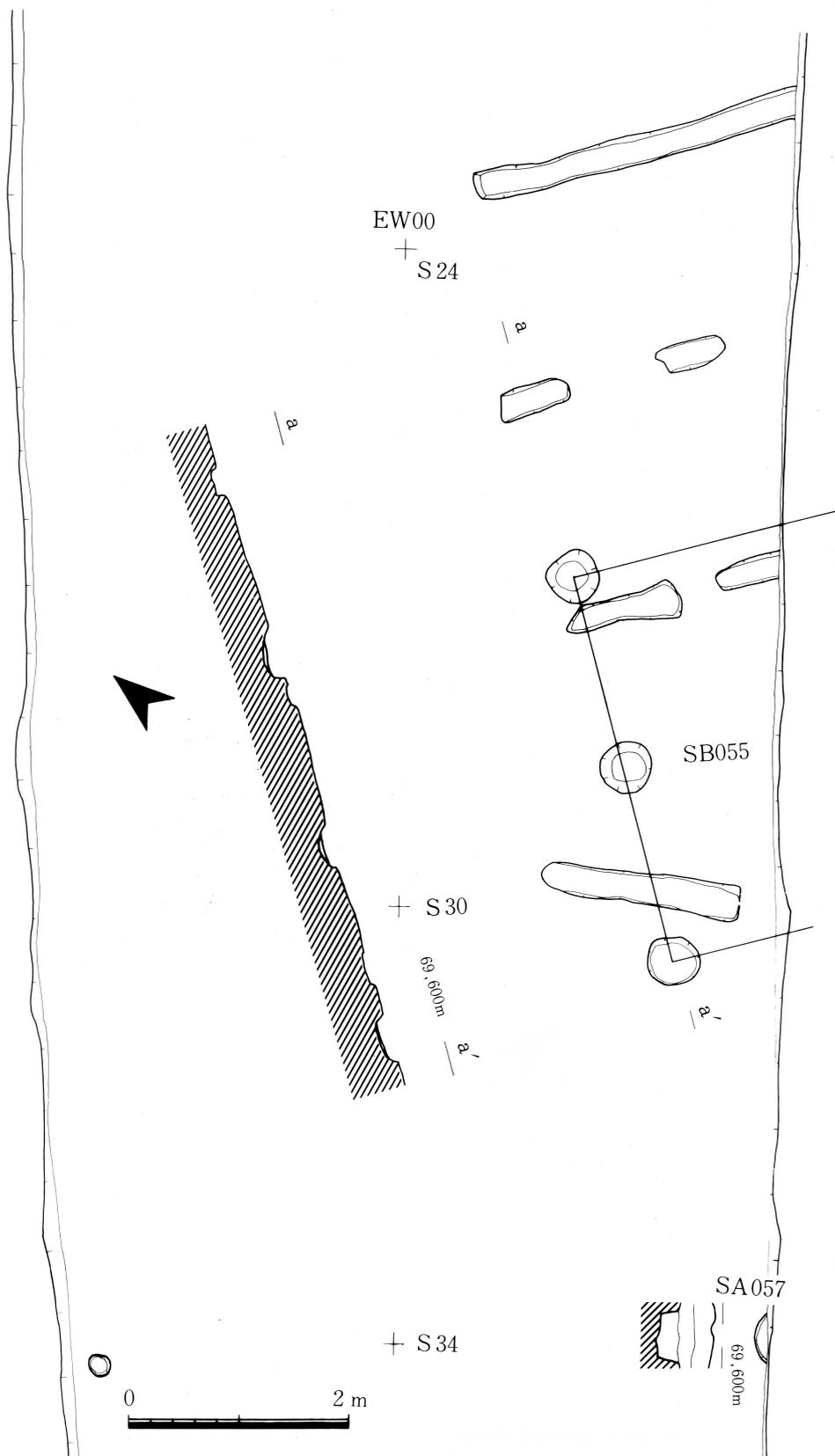


第7图 B地区遺構配置図

うち、溝跡 S D051・052・053・054・056・058は、いわゆるトレンチャーによるもので、報告からは除く。以下、溝跡を除いた遺構について記述する。

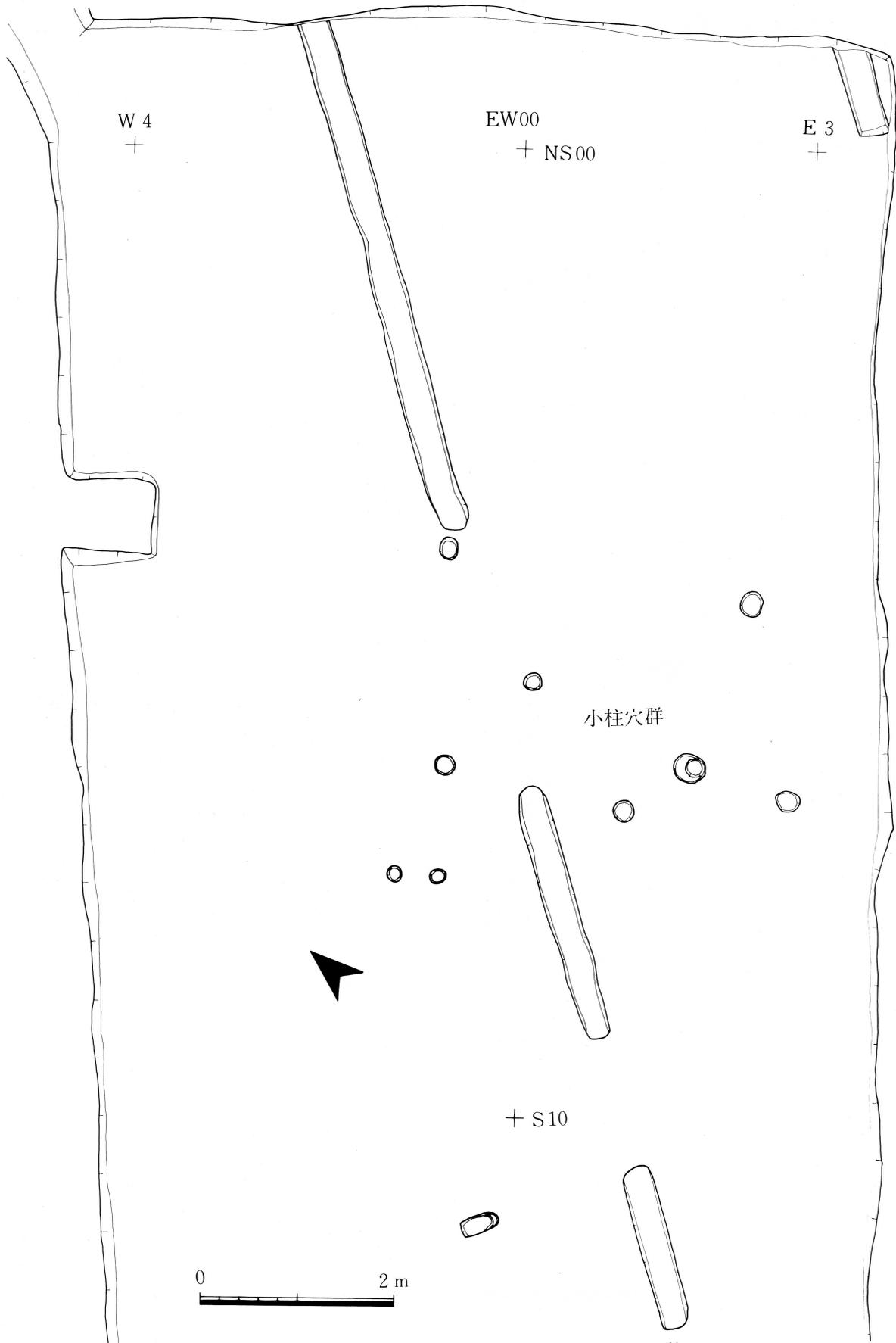
建物跡 S B055 (第 8 図)

建物跡 S B055は、発掘区南寄りから発見された掘立柱建物跡である。建物跡は東西棟で西妻を検出



第 8 図 建物跡 S B055・柱穴跡 S A057

したのみで、東妻部は発掘区外に延びるため不明である。建物方位は西妻梁行で磁北に対し、N36°E偏する。



第9図 小柱穴跡群

柱間寸法は西妻心々で北から1.58m、1.583mで、梁行総長は10.5尺となる。

柱掘り方は径47～48cmの円形で、深さは削平のため15cm前後しか残存していない。柱痕跡は認められない。掘り方埋土は、やや軟質の黒褐色土で柱底に当たる部分に黄褐色土火山灰ブロックが混じる。出土遺物はない。

柱穴跡 S A 057 (第 8 図)

柱穴跡 S A 057は発掘区南寄りの東壁際から発見された柱掘り方で、建物跡 S B 055西妻から南3.5mのところ柱筋を揃えるようにしてある。発見できたのは1個だけだが、身舎が発掘区外にある建物跡と推定できる。

柱掘り方は径45cm以上の円形で、深さは20cmある。埋土は軟質黒色土の単層だが、掘り方底面に柱当りによる緩い凹みがある。出土遺物はない。

柱穴跡 (第 9 図)

発掘区北半を中心に10数個の小柱穴が発見された。形状は円形が主体である。掘り方の規模は、直径15cm～35cmまでであるが、径20cm前後のものが多い。埋土は黒褐色土単層で、若干の黄褐色火山灰土粒が混じる。深さは5cm～10cmと浅い。

これらの柱穴跡は、建物跡や柱列跡としてまとまるものではなく、また出土遺物もなかった。

Ⅲ、まとめ

龍ヶ馬場Ⅱ遺跡で発見された遺構には、土塋跡、溝跡、建物跡、柱穴群などがある。ただし、これらの遺構群からの伴出遺物は皆無であった。このため、遺構群の帰属年代については不明である。ここでは、遺構のあり方について記すことでまとめにかえたい。

発掘区は南北A・Bの両地区に分かれ、A地区に対して南側のB地区は1m弱ほど地山面が高く、地形的には北側へ緩く傾斜する。A地区は土塋跡と輪郭の不規則な溝跡を除くとすべて小柱穴群である。前二者に対して後者は主に南半に集中する特徴を示す。

B地区は10数個の規模の小さい柱穴跡と建物跡からなる。小柱穴は主に発掘区北半にまとまっている。建物跡は掘立柱建で、全体規模は不明だが、西側柱の妻部を検出できた。梁行総長は10.5尺なので、柱間は5.25尺等間となる。なお、桁行方向の柱掘り方は不明だが、一間が7尺以上になると推定できる。この建物の南3.5mのところから柱掘り方がひとつ検出できた。身舎は発掘区外にあるため、規模・構造は不明だが、掘り方の特徴は掘立柱のそれなので、西妻の柱筋を揃えた建物跡がもう1棟存在する考えた。

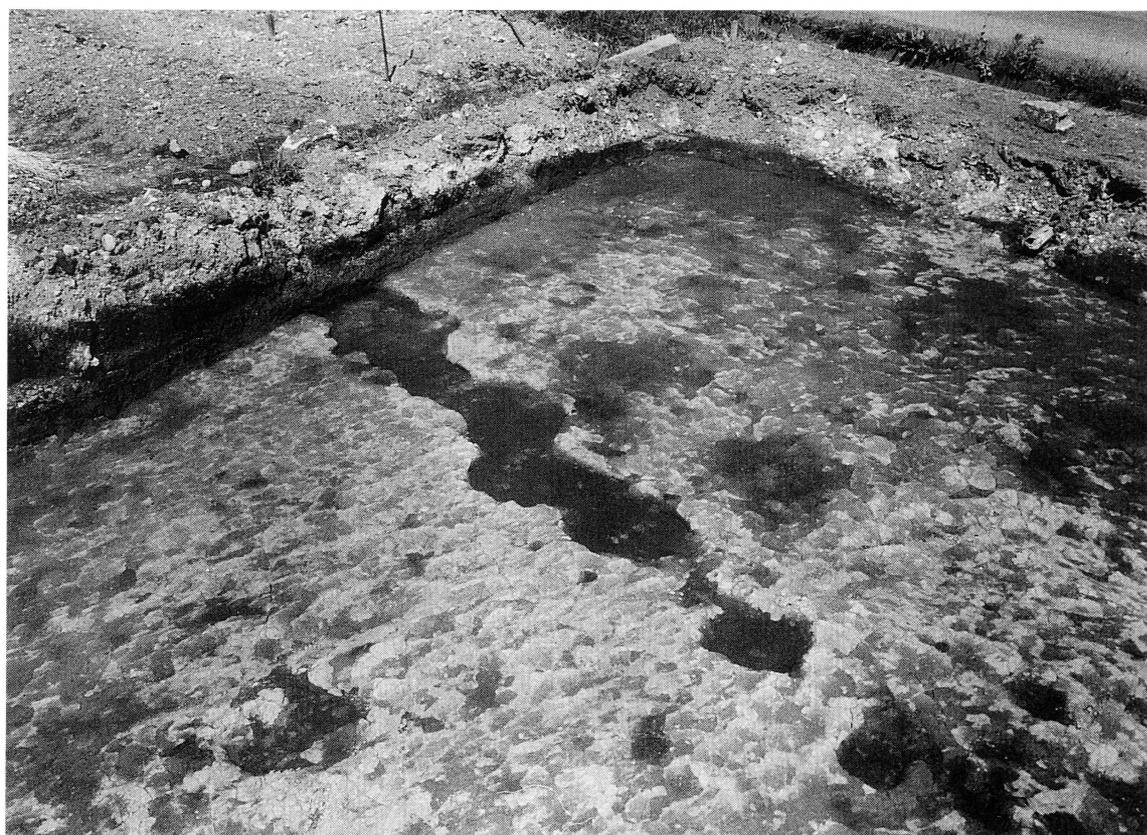
当遺跡の近くには、1994年発掘調査が実施された龍ヶ馬場遺跡¹⁾があり、平安時代の住居跡等が発見されている。今回の発掘調査も上記遺跡と関連する遺構の存在が予想されたが、結果はそれを明確にできなかった。

1) 本書Ⅰの脚註2)

写真図版



図版1 上・A地区発掘区全景 下・同近景（南から）



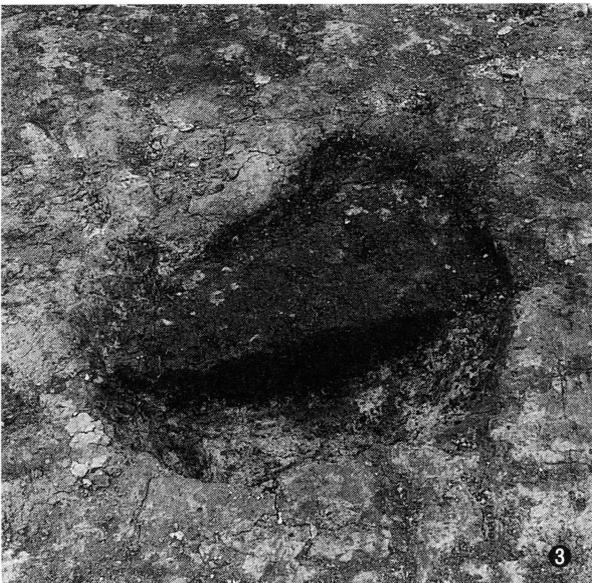
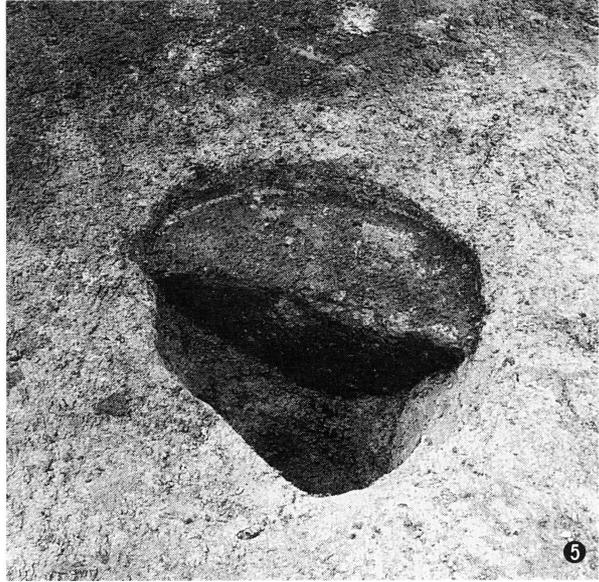
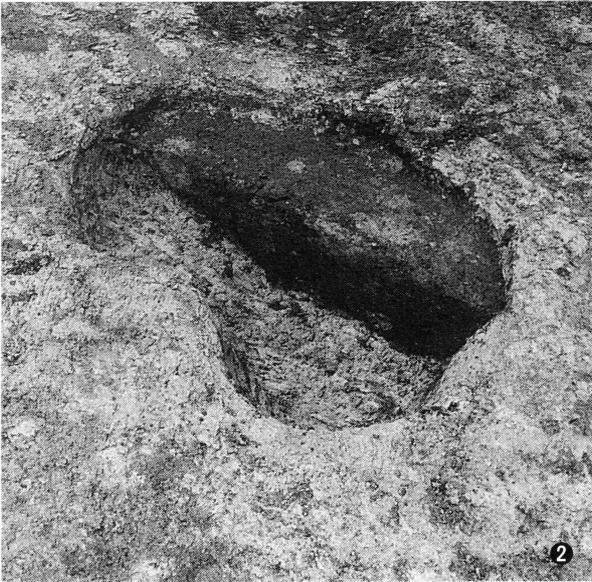
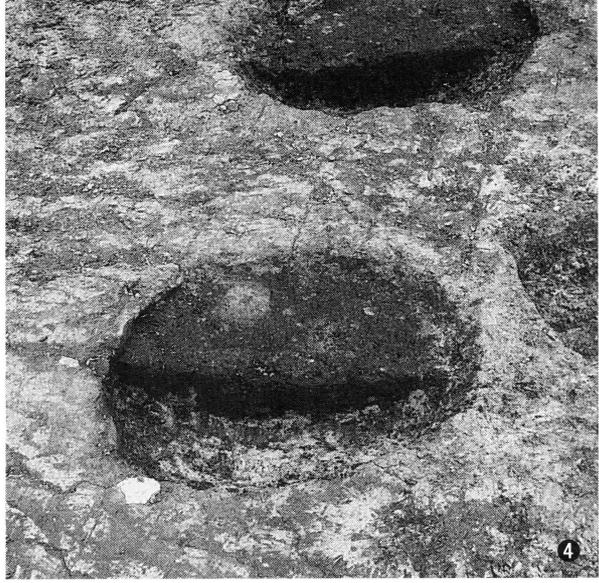
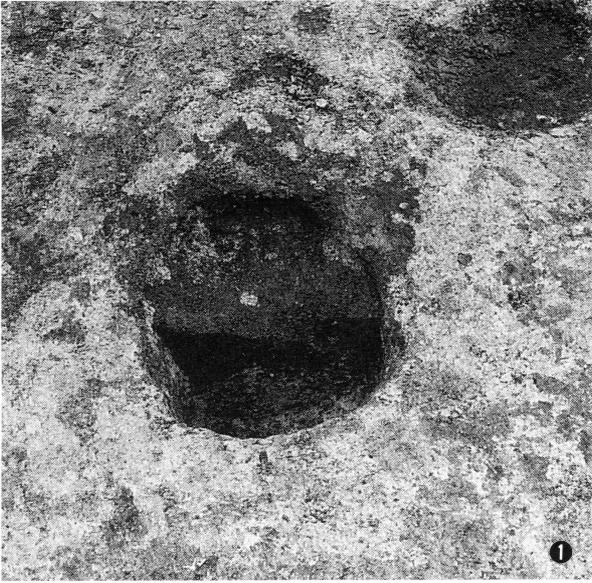
图版2 上·土坑迹SK01 下·沟迹SD02



図版3 上・柱穴跡No.7、No.11、No.25（北東から） 下・柱穴跡No.16（東から）



図版4 上・柱穴跡No.17、No.20（東から） 下・柱穴跡No.14（南東から）



図版 5 柱穴跡立割り状況

1 No.11

2 No.16

3 No.17

4 No.20

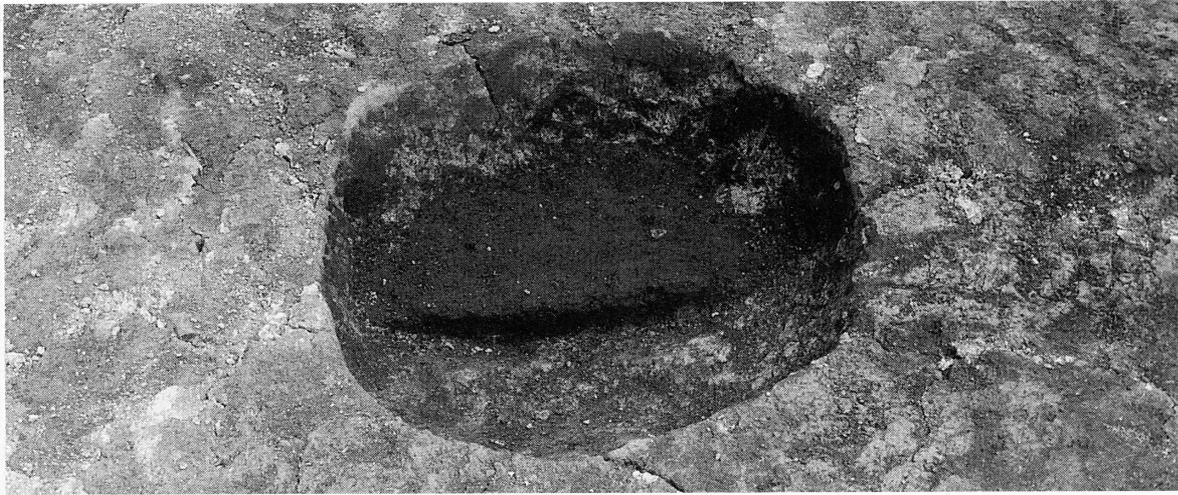
5 No.14



図版6 上・B地区発掘区全景 下・同近景（北から）



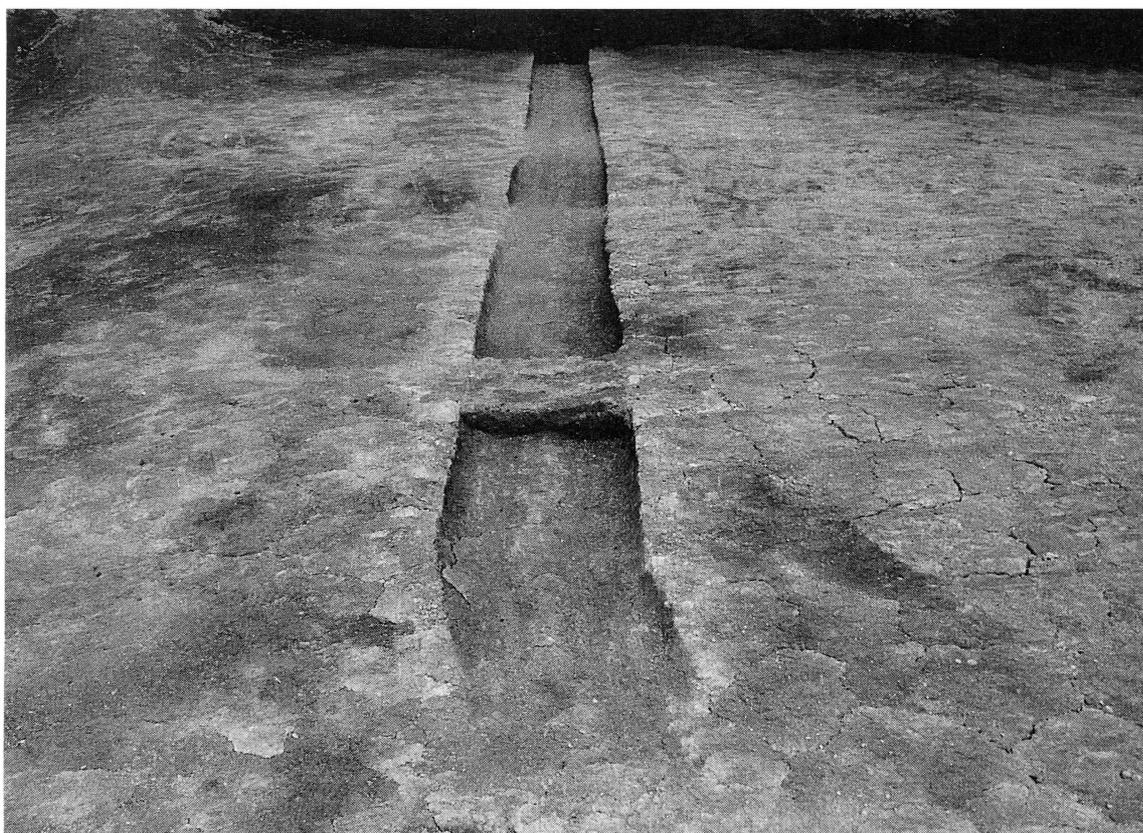
図版7 上・建物跡S B055全景（北西から） 下・同近景（西から）



図版8 柱掘り方立割り状況 上・S B 055中柱、中・同北柱 下・柱穴跡 S A 057



図版9 B地区小柱穴跡群 上・全景（北から） 下・近景（西から）



図版10 B地区発掘調査光景とトレンチャー痕跡

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書 第5集

龍ヶ馬場Ⅱ遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

平成8年3月31日発行

編集／発行 財団法人 水沢市文化振興財団
水沢市埋蔵文化財調査センター
〒023 岩手県水沢市佐倉河字九蔵田96-1
電話 0197-22-4400
FAX 0197-22-4600

印刷 リンベル 鈴木印刷(株) 水沢営業所
〒023 岩手県水沢市東大通り2丁目3-3
TEL・FAX 0197-22-5629

